

7 幼・小・中の12年間で、子供の探究的な学びを支える

**こんな実践**

隣接する幼稚園・小学校・中学校で、12年間の子供の育ちを見つめることで見いだした共通する子供の“よさ”をもとに、幼・小・中の全職員が大切にしていきたいものを確認し合い、子供の追究の姿を支えていこうとした事例。

実践学校 J幼稚園・K小学校・L中学校

実践学年 全職員

実践時期 通年

**(1) 園児の遊びの姿に学ぶ**

隣接するJ幼稚園・K小学校・L中学校では、園児の遊びにうちこむ姿の中に、幼・小・中の12年間の学びを貫くものがあると考え、園児の遊びのビデオを、幼・小・中の全職員で視聴する機会を設けました。小学校や中学校の教員にとっては、園での遊びの姿自体が新鮮であり、その姿の中にある“よさ”に気付くことができました。また、小学校の教員は、園児の遊びに参加し、園児と一緒に遊んでみる中で、次から次へとやりたいことをみつけていく姿や、自分のやり方を持ち進んでいこうとする姿、何度も繰り返しながらよりよいものを作ろうとする姿など、“ただ遊んでいる”と思っていた園児の遊びの中に、学びの姿を見いだすことができました。



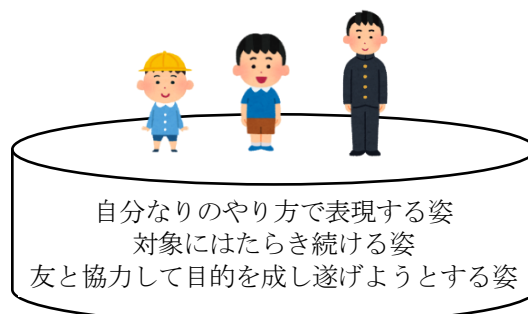
**(2) 幼・小・中の子供たちに共通するよさを見いだす**

さらに、園児の姿から感じた“よさ”を視点に、幼・小・中の目の前の子供の“よさ”を見つめ直してみることで、「自分なりのやり方で表現する姿」や「対象にはたらき続ける姿」、「友と協力して目的を成し遂げようとする姿」などを、幼・小・中を通して子供たちに共通する“よさ”として見いだすことができました。



子供たちに見いだした共通する“よさ”

その後も、年に数回、小・中学校の教員が実際の保育を参観する機会を設け、園児の遊びの姿から捉えたことを語り合いました。最初は、目の前の園児の姿についての話が中心でしたが、次第に、小学校や中学校の自分が受け持つクラスの子供の姿を通して語られるようになっていきました。



### (3) 目の前の子供を見つめなおす

幼・小・中を通して子供たちに共通する“よさ”で、目の前の子供の姿を見つめなおしてすることで、教員の中に、次のような変化が生まれてきました。



幼稚園教員

園児の遊びにうちこむ姿が、12年間の学びの基礎になるのね。

幼稚園では、幼小中で共通する子どもの“よさ”を視点を、子供がより主体的に遊べる環境構成・援助のあり方について考えるようになりました。



小学校教員

子供が幼稚園で自分の思いを叶えようと、あらゆる方法を試しながら挑んでいた姿を、小学校でつぶしてしまっていないだろうか。もっと、子供のやってみたいという気持ちを支えたいな。

小学校では、子供の「やりたい」という思いを日常生活の中から見いだして単元を構想するようになりました。



中学校教員

「中学までに、ここまでできるようにしておいてほしい」なんて、とても言えない。生徒がとことん追究できるのも、幼稚園での遊びがあり、小学校での学びがあるからこそだな。

中学校では、子供が幼小で育んできた“よさ”を発揮しながら、実生活や実社会の課題を解決する総合的な学習の時間の充実が図られました。



#### ここがポイント

幼稚園・小学校・中学校で、それぞれ別の場での学びととらえてしまうのではなく、子供の中で幼・小・中の12年間でどのように連続してつながっているのか、子供の立場から学びを捉えなおして試みるのが大切です。

#### まとめ

自発的な活動である遊びの姿の中で、どのような資質・能力が育まれているのかを切り口に、子供の姿を見つめなおして試みることで、目の前の子供の姿を受け入れ、その後の探究的な学びを支えていこうとする教員の変化を生み出していきました。